

## 巻頭言

エア・アンド・スペース・パワー研究をお手に取って頂き、誠に有難うございます。

昨年は、2月のロシアによるウクライナ侵略を契機として、各国が自国の安全保障の在り方について見直しを迫られた年でもあります。わが国政府においても、昨年末に、国家安全保障戦略、国家防衛戦略及び防衛力整備計画の3つの文書が改定されました。

新たに策定された「国家防衛戦略」では、航空自衛隊を航空宇宙自衛隊にすることに加えて、宇宙・サイバー・電磁波領域の能力を防衛力に直結するよう政府全体で強化することや、認知領域を含めた情報戦等への対応の強化等を図り「領域横断作戦能力」を重視して、国家安全保障の最終的な担保となる防衛力を抜本的に強化するための体制整備を進めていくことが明記されています。

航空自衛隊においても現状の安全保障環境に対応するための進化をすべく、様々な施策に取り組んでいます。こうした中、わが国は引き続き、純然な有事でも平時でもないグレーゾーン事態への対処が必要な状況にあり、新たな領域と従来の領域とを有機的に融合した領域横断的な戦力発揮を行うことが極めて重要です。

以上の認識から、今号では特集記事を設定せず、自由論題として様々な観点から安全保障に係る問題を執筆者個人で設定し調査研究を深化させるとともに、読者が将来の安全保障環境に日本がどう対応していくべきかについて考える上での一助となるよう心掛けました。

『戦略の階層』の再検討（佐久間）では、近年の戦略・戦争研究において、技術の進展を背景とした戦争遂行の方法の変化について、技術を「戦略の階層」の一つとみなすことができる旨を確認し、「技術観」に関する議論を射程に収め、技術哲学における「技術決定論」と「社会決定論」の見方に対応した「戦略の階層」を提示しています。

「認知の罫を知る研究」（山本）では、武力侵攻（armed invasion）を未然に阻止する方法のうち、抑止（deterrence）に心理学的アプローチを導入する狙いやその効果を検討し、抑止をめぐる現行の議論の構造的欠陥がどこにあり、それを補う方法として心理学的知見を導入する場所がいずれにあるのかを提示しています。

「統合全領域作戦に関する一考察」(原野)では、米軍における統合全領域作戦(Joint All-Domain Operations : JADO)の概要と米空軍の運用との関係を解説し、これらの取組みについての航空自衛隊に対する示唆を述べています。

更に、「研究ノート」として、「Wargaming」(岸本)では、航空自衛隊が直面している作戦運用上の新たな課題を整理して、その本質を明らかにするとともに、この課題にWargaming手法を活用して対応する米軍等の取組みについて紹介し、航空自衛隊内にWargamingを普及するための活動を提示しています。同じく、「ロシアにとっての『認知領域の戦い』」(長沼)では、ロシアの「認知領域の戦い」の中核を成すと考えられる「反射制御理論」について、その誕生及び展開に焦点を当て、先行研究を辿りながら時系列に概観することにより、わが国へのインプリケーションを述べています。

加えて、昨年9月に幹部学校が主催した、「令和4年度第1回航空宇宙防衛力シンポジウム」で基調講演をされた米国のシンクタンクCSBA(戦略予算評価センター)所長トーマス・マンケン氏の英文原稿及び日本語抄訳を掲載しています。

これらの記事をお読み頂き、読者の方々に航空自衛隊の将来について関心をお寄せ頂くとともに、御意見等を頂戴できれば幸甚です。研究機関や読者の皆様方からの貴重な御意見を踏まえ、エア・アンド・スペース・パワー研究の発展を期す所存です。併せて、航空自衛隊の現役隊員やOBのみならず、安全保障に高い関心をお持ちの皆様方からの論文投稿もお待ちしております。

最後に、本誌に御協力頂いた方々に心から感謝を申し上げるとともに、これからも航空研究センターの研究等諸活動に御理解と御協力をお願い申し上げます。

令和5年1月  
『エア・アンド・スペース・パワー研究』編集委員長  
航空自衛隊幹部学校 副校長  
空将補 秋山 圭太郎